

「異」と「文化」をめぐるアクティブ・ナレッジの形成
 -文化的差異の政治性の観点から-
 The Role of Active Knowledge in The Politics of 'Difference'

杉原由美, 慶應義塾大学、オーリリチャ, 千葉大学
 Yumi Sugihara, Keio University, Richa Ohri, Chiba University

1. はじめに

昨今のグローバル人材育成を課題とする大学教育の動向の中で、留学生と現地学生を意図的に対象とし言語文化背景が多様な学生が協働的に学ぶ授業が広く展開されている。そのような場においては、「異」と「文化」の概念が相互行為に大きな影響を与えることが予測される。なぜならば、文化的背景が異なる人々が集まる場では、「異」の部分が注目されやすいからである。本研究では、日本における留学生と日本人学生を対象とした授業において、「異」と「文化」をめぐる学習の中で、学生が抱く「矛盾」という感情に注目した研究を行う。

本研究に先駆け、Ohri・杉原（2017）は、留学生と日本人学生を対象とした授業の研究を行い、異なる文化をめぐる知識を次の三種類に分類して捉えることを提案した。1つ目は、繰り返されてきたステレオタイプ的な言説を何も考えずにおうむ返しする「レピティティブ・ナレッジ (repetitive knowledge)」。2つ目は、本やメディア等から一方的に得た、自身の経験と直接結びつかない「パッシブ・ナレッジ (passive knowledge)」。3つ目が、先の2つの知識や相互行為の場で得た新しい知識を、自分のこととして捉えて、その背景にある政治性 (politics、微細な権力作用や力関係が働いていること) に気づく「アクティブ・ナレッジ (active knowledge)」である。

更に、この「アクティブ・ナレッジ」形成について、学生の振り返りシートをデータとして質的な分析を行い、次の段階があることがわかった。まず〔1. 自分のストーリーを語る学生〕が出現し、それが学生たちにとって〔2. 自分たちが経験する問題〕となり、その結果〔3. 自分に同じような経験がないか内省〕する学生が現れ、そのプロセスの中で〔4. 異なることと文化の政治性に気づく〕発話があり、〔5. 意識と行動を変える必要性に気づく〕学生がいることが確認された。

2. 本研究の目的と方法

筆者らは、留学生と日本人学生がともに学ぶ大学授業において、アクティブ・ナレッジを育成する必要があると考えている。その育成のねらいは、文化的背景が異なる人々が集まる場で、学生が得た新しい知識を「批判的・主体的に」捉えられるようになることである。この「批判的・主体的」である学びについて、ブラジルで識字教育実践を展開したパウロ・フレイレは「人間化の問題」と表現し、「抑圧する者と抑圧される者の間の矛盾を乗り越え、そのどちら側にも自由をも

たらし、生き生きと生きるような新しい人間」になることとして追求している（フレイレ 2011）。本研究では、この「矛盾」という感情に注目する。ここでいう「矛盾」とは、フレイレ（同上）を参考に、1）「抑圧する者と抑圧される者の間の矛盾」つまり「対立」するような、同時に両立できない関係、2）「抑圧される者の内にある矛盾」つまり「内面に抑圧する者を抱える二重性」「引き裂かれた自分自身」「ジレンマ」と言い換えられるような感情を表すと捉える。

本研究では、Ohri・杉原（同上）と同じ授業実践を対象として、以下の研究課題を追求する。研究課題1：アクティブ・ナレッジの形成の中で、学生が抱える矛盾がどのようなものか。研究課題2：その矛盾は乗り越えることが難しいのか。そうならば、なぜ難しいのか。

研究対象は、日本の某大学における「多文化コミュニケーション」講義科目（日本育ち日本人学生 20名、帰国生 12名、留学生・外国ルーツ等の学生 13名が履修）の15回中9回目の授業である。対象データは、授業後に学生が記載した振り返りシート、授業中の教師の記述とし、質的な分析を行う。

この回の授業内容は、「外国人はお断り（差別・排除の問題）」というテーマで日本社会において外国人が直面する住居と就業の問題を取り上げた。南米日系人二世が抱える問題の「記事」、外国人が家を借りる苦労話の「漫画」、同じ大学の先輩留学生のストーリーをスクリプトとビデオにして教師からの問題提起を行った後、4人前後の小グループ（学生の言語文化背景が多様になるメンバー構成）でディスカッションを行い、授業全体で共有した。授業後には、学生各自のリフレクションを促すための振り返りシートの提出を求めた。

3. 分析

分析結果として、3名の学生の振り返りシートとして行った分析を示す。まず〔アクティブ・ナレッジの形成の段階〕に照らし合わせてどの段階にあるのかを示す。その上で、その学生が抱えていると解釈される矛盾と、その矛盾を乗り越えることの難しさについて分析する。なお、学生の振り返りシートのことばは「イタリック体」で、矛盾と解釈される点については【 】内に提示する。

3-1. 学生 A の事例

学生 A のアクティブ・ナレッジの形成は、〔1. 自分のストーリーを語り〕同じ小グループの学生たちにとって〔2. 自分たちが経験する問題〕となり、〔3. 自分の経験を内省〕し、その中で〔4. 異なることと文化の政治性に気づく〕いて〔5. 意識と行動を変える必要性に気づく〕いていると同定した。つまり、アクティブ・ナレッジ形成の全ての段階が現れている事例である。

学生 A の振り返りシートに現れている矛盾は、「私自身も『ハーフだから』『顔が日本人っぽくないから』という理由で理不尽で悲しい思いをした経験がありました」ということばから、【日本が生活拠点でありながら、外見的差異によ

って日本人っぽい人たちから「奇妙な生物」と異物として扱われるという矛盾】を抱えてきたことがわかる。さらに、「そのように考えてしまうのも無理ないか」と「受け入れ」てきたことを「一種の自己防衛」だったと気づき、「その社会のあり方を認めているということであり、悲しいことだ」と記している。つまり、【自分を「別枠で捉え」る日本人っぽい人たちの思考を受け入れる＝内面に抑圧する者を抱える二重性としての矛盾】が見られる。

また、学生 A が小グループで話した内容を授業全体で話した時のことに関して、【他の履修者から「理解が示されない可能性」を危惧して「とても緊張」したと記している。「このような経験は実際にしてみないと、どのような感情を抱くのか想像しにくい」ため、経験者が「進んで発信していく必要があるんじゃないか」と訴えている点との間に、ジレンマという類の矛盾】が見られる。加えて、矛盾を乗り越えることの難しさ（課題 2）も示されていると捉えられる。

3-2. 学生 B の事例

学生 B のアクティブ・ナレッジの形成は、〔1. 自分のストーリーを語り〕〔2. 自分たちが経験する問題〕になり〔3. 自分の経験を内省〕し、その中で〔4. 異なることと文化の政治性に気づ〕いているが、〔5. 意識と行動を変える必要性に気づ〕いていないと捉えられた。

学生 B は振り返りシートに「グループの人が私に日本で外国人であることが原因で不当解雇されたり部屋探しのとき断られたりしたことがあるか聞かれ」たことについて記している。その中で、【部屋探しの際「日本語がある程度できて、保証してくれる者がいても、日本で長く滞在する資格のビザを持っていないが」つまり十分資格を満たしているにもかかわらず、「外国人であることが原因で審査に落ち」という矛盾】を経験していることが示されている。

そして、こうした自身の扱われ方について【「残念で悔しかった」としながらも、「日本人と対等に扱われること（略）は無理」で「国家間の外交的な問題」もあり「家主の立場から」みた場合やバイト先の場合でも「日本人の方を外国人より優先するのも（略）当たり前」なので「仕方ない」という、内なる二重性が見られる矛盾した捉え方】を示している。この捉え方に、矛盾を乗り越える難しさ（課題 2）が表されていると言えるだろう。

さらに「外国人に偏見ばかり持っていてわざと差別するのはないようにしなければならない」「外国人も日本人のように一人一人の能力や個性、意欲等を重視する必要がある」と記しているが、学生 A のように自分自身にできることの提示はなく、そもそもこのような経験について聞かれたから答えたという受動的な態度にも、矛盾を乗り越えるために声を上げることの難しさが表れていると言える。

3-3. 学生Cの事例

学生Cのアクティブ・ナレッジの形成は、〔1. 自分のストーリーを語る学生が出現〕している状況にあるが〔2. 自分たちが経験する問題〕になっていないのか、もしくはその先の〔3. 自分の経験を内省〕し、その中で〔4. 異なることと文化の政治性に気づ〕いているが、〔5. 意識と行動を変える必要性に気づ〕いていないのか、どちらにあるのかわからない事例である。

学生Cは、この日の授業の中で印象に残ったこととして、学生Aが全体共有の時間に語った「バイトを断られた理由」に注目して振り返りシートに記している。「ハーフの人が『見た目が思ったより外国人だから』という理由で断られたことに驚きました」とし、「お店の人が考える雰囲気ではなかった」可能性を指摘して「人種差別のように聞こえるが『思ったより暗かった』などという理由だと思います」と記した。この態度が、矛盾を乗り越える難しさ（課題2）につながるのではないか。具体的には、学生Aの矛盾を訴えることへの緊張感、学生Bの諦めを生む要因の一つではないかと考える。

4. 考察

2つの研究課題について考察を行う。まず研究課題1について、アクティブ・ナレッジの形成の中で学生が抱える矛盾は、学生AとBは彼らが受けた不当な扱いに対して2つの矛盾を抱えているとまとめられる。1つは、ストーリーを語ることをめぐる矛盾である。矛盾を抱えながらも「理解してもらえない」恐れや不安がある。もう1つは、意識・行動を変えることをめぐる矛盾である。自分自身を無力な存在であると、Bは位置付け、Aは過去に位置付けていた。

このように、不当な扱いに対して声をあげてもどうにもならないと捉え、矛盾を心の中に閉じ込めて周りに順応することは、安寧を求める行為と言える。また、日本人との差異があるのだから不当な扱いは当然のことだと捉えることは、文化的に異なることによって立ち現れる政治性・権力性に気づきながらも、合理的な理由づけをしている行為と言える。これらの行為によって、不平等が循環される。

次に研究課題2については、学生が抱える矛盾は乗り越えることが難しいと言える。なぜ難しいのかの理由は、2点にまとめられる。1つは、声を発することへの恐怖である。学生AとBに見られる、日本社会に受け入れてもらいたいという気持ちと、理解してもらえないことを恐れて不安を抱くという矛盾に関して、多少の不平等を我慢すれば衝突しないで生活ができるということは彼らの利益につながる。また「悲しい」という言葉から、彼らに被抑圧者であるという自覚が見え、声をあげられない現実が浮かび上がる。

もう1つは、声を発しても問題化されないことである。学生Aの「悲しい」経験について、学生Cは「問題ではない」あるいは「過剰反応だ」という態度

を示している。問題化しないということは、抑圧的な立場に位置取り、その位置取りを維持し、抑圧者と被抑圧者の秩序を乱さないことにつながる。このようなやり方は、学生Cだけがとるものではなく、文化的マジョリティがマイノリティの声を無視する際にとられるやり方だと捉えられる。

5. 総合考察

フレイレ（2011）は、「被抑圧者の教育学」の観点から、「よりよき人間になること」は「自由になること」としている。本研究では、この自由に関する矛盾というもの、異文化をめぐる、今日の日本社会においてどのように立ち現れるものなのか一端を示した。文化的マジョリティもマイノリティも、批判的意識を持つことは無秩序につながるのではないかと恐れ、危険な自由よりも安寧を求め、それが社会の現状維持につながっている。こうしたことを意識化して、行動を変える必要性に気づくことが「人間化」であり、「異」と「文化」をめぐるアクティブ・ナレッジの育成のねらいである。

最後に、本研究で示された矛盾のサイクルを脱することを、教育の中でどのように促せるか追究することを今後の課題としたい。

参考文献

- パウロ・フレイレ（2011）訳 三砂ちづる『新訳被抑圧者の教育学』亜紀書
- Ohri Richa, 杉原由美（2017）「『異』と『文化』のポリティックスーアクティブ・ナレッジを育む言語文化教育」『言語文化教育研究会第3回年次大会：言語文化教育のポリティックス予稿集』pp.101-106. <http://alce.jp/annual/2016/>

付記：本研究は、慶應義塾学事振興資金研究補助を受けて行ったものである。